TEI 鼎談 DAN
学問と職業のカンケイから、大学進学を考える本

明治学院大学 国際学部

世界と世界あるいは日本と世界をつなぐ存在として活躍できる人材育成に注力しています。習熟度の質を高める少人数制のカリキュラム、在学中に留学経験ができる合理的なシステムなどを通じて、語学も堪能なコミュニケーションのプロフェッショナルを目指せます。

■大学生
田中真穂さん

■先生
竹尾茂樹先生

■卒業生
花園千波さん

CONTENTS

●プロフィール
●大学生活について
●就職活動、仕事について
●5年後に向けて
●高校生へのアドバイス

●プロフィール

「国際学部」の特徴について教えてください。

■先生
日本国内で最初に「国際」という言葉を冠する学部としてスタートしたのが 1986 年。これまでに多くの卒業生を世界へと送り出して来ました。学部開設から約 30 年が経過したわけですが、変わることのない教育目標として「国際社会で活躍する人材の育成」というものを掲げています。
国際社会での活躍。そんな風に表現すると、特に高校生のみなさんは世界を舞台としたビジネスシーンで英語を駆使、いろいろな国々の人々とコミュニケーションを図るイメージを持つのではないでしょうか。もちろんそういったイメージも決して間違いではありません。

しかしながら「国際学部」が考える人物像は、活躍の舞台となる諸外国の風土や文化、歴史的背景、経済的状況をしっかりと理解した上で行動を起こせる人のことを指しています。
例えば、世界で起きている紛争などの諸問題をよく見ると、宗教対立とか、経済的な貧困などが影響していることがしばしばあります。もしそうした社会背景に目を閉ざしたまま、海外支援や共同のビジネスなどを行ってしまったらどうでしょうか？それは双方の関係を良好にするどころか、下手をするとタブーの領域に触れ、深刻な問題を招く可能性だってあるかもしれないのです。

■卒業生
確かにその要素はあるでしょうね。ちょっとした理解のズレが大きな摩擦になるケースも国際社会では起こりがちですから。

■先生
そういった理解のズレはお互いの文化や世界観を知っておくことで回避することもできますし、知り得るからこそ築ける関係や生まれる価値もあるでしょう。明治学院大学が育てたいのは、そういった場面において、知識と語学力とコミュニケーションスキルを持って自信を持って活躍できる力、そして世界と世界あるいは日本と世界をつなぐ存在として欠かせない人間性です。英語や語学のプロフェッショナルではなく、英語や語学も堪能なコミュニケーションのプロフェッショナルがイメージに近いですね。

「国際学部」には現在、いくつの学科があるのでしょうか?

■先生
「国際学科」と 2011 年に新設された「国際キャリア学科」の２つの学科で構成されています。学科を細かく分類していないため、全ての学生が幅広い知識を習得できるようになっていることも特徴です。広く学ぶことと何かに特化して学ぶこと。それぞれに一長一短はありますが、ある分野に特化しすぎると弱い部分がどうしても生まれます。例えばヨーロッパには詳しいがアジアにはさっぱり。歴史的な検証は得意だけど経済的な観点から世界を観る力が弱いといったようにです。そういった知識面の弱点や経験不足を補える教育の体制を整えることも真の国際人育成において大事だと考えています。お二人は広く学ぶことに対してどんな感想を持っていますか？

■大学生
なるほど！どうりで授業で学ぶ科目が多かったんですね（笑）。でも広い視野で勉強できたことは、振り返ってみるとよかったと思います。知識にムラがないというか、いざという時も応用ができるというか。

■卒業生
そうですね。思考の柔軟性を鍛えるという面では、さまざまな知識の引き出しを持っていることは有益だと思います。広く学ぶ中で「これは面白い」と思えるものに出会ったらとことん追求しても良いですしね。

■先生
フォローをどうもありがとう。学生たちが、お二人のような方を見習って、もっと頑張ってもらいたいと思っているんですよ（笑）。
お二人も十分に感じていると思いますが、世界というフィールドではとても広い範囲が勉強の対象となります。歴史、文化、政治、経済などなど。いろいろな側面から世界を見つめていく上で、知れば知るほど面白い分野ではありますが、学ぶ対象が多いがゆえにわかりづらくなってしまうことも時にあると思います。そこで「国際学部」では、「国際経済」「国際関係論（法律）」「文化」という３つの柱を設け、それぞれの分野において枝分かれしたカリキュラムを通じて合理的に理解を深めていくことができるようになっています。

「国際学科」と「国際キャリア学科」。その違いはどこにあるのでしょうか?

■先生

まず「国際学科」についてご紹介しましょう。この学科では、豊富な国際経験を持つ専門家が文化、経済、政治などをはじめとした広い範囲において指導にあたっていきます。授業で取り上げるテーマも多種多彩で平和に関するものや環境問題など、今、世界をとりまいているさまざまな課題を掘り下げてます。
また、これは「国際学科」の特徴のひとつとも言えますが、段階的に力を蓄積できるカリキュラムで学生の知識と経験を高めていくことができます。一年次は平均 10 人ほどで実施される基礎演習、40 人前後で受講する基礎講座を通じて、問題の見つけかたや考え方といった大学で学ぶためのスキルそのものを身につけていきます。この時期は、高校生の思考から大きく脱皮して、国際人を目指す大学生として飛躍するための大事な時期ととらえています。
2 年次からは専門性を高めていくことになります。「平和研究」「多文化社会」「国際・比較経済」「環境問題」「比較文化」「比較法制」に分かれた６つの専攻からいずれかを選択し、興味ある分野を掘り下げています。一般的な大学の場合３年次、または４年次から専攻分野に進むことが普通ですが「国際学科」では、できるだけ早い段階から理解を深め、自分自身で学んでいく楽しさを実感できるようになっていることが特徴です。

■大学生
３年～４年次は長期インターンシップなどによって海外との接点が増えるようになるなど、在学中に海外との距離を近づけられることも「国際学科」のいいところだと思います。基礎から応用、そして実際の海外で経験を積む４年間、とても合理的な大学生活を過ごせました。

■先生
もうひとつの「国際キャリア学科」は文字通り、国際舞台で確かなキャリアを積み上げる資質を磨き上げる教育に特化しています。例えば英語力の強化という意味で、すべての授業は英語で実施するだけでなく「国際キャリア学科」の学生には、少なくとも１年間、長くて２年間は海外留学にチャレンジするように薦めています。

現在 36 の協定校が世界に点在しています。明治学院大学に収めた学費がそのまま現地校での学費となる仕組みを採用しています。これは学生のみなさんの経済的な負担をできるだけ軽減しつつ、世界の広さを体験できるチャンスを提供するためです。こういった海外留学の仕組みをあえて利用せず、自らで留学先を決めてくるアクティブな学生も明治学院大学には少なくありませんが（笑）、この仕組みを積極的に取り入れれば、学校同士の協定がしっかりとできている安全な環境の中で学べるということを強調したいと思います。

●大学生活について

お二人が「国際学部」を選んだ理由を教えていただけますか。

■大学生
高校一年の頃、メリーランドに留学をしていました。そこで出会った多くの人に影響を受けたことが「国際的」なことに興味を持ったきっかけでした。当時はまだ具体的な目標はなかったものの、いずれは海外に活躍の場を見出したいと考えていました。そのためには語学ができるのは当たり前、さらに国際的な視点も持っておかなければならないと思ったのです。

■先生
単純な海外への興味。若いうちはそれでもいいと思いますよ。むしろすでに世界に目を向けていたことに感心します。さすが！

■大学生
先ほど先生から留学のお話がでましたが、実は私もそこについては非常に魅力を感じていました。なぜなら、大学在学中に絶対に留学をしておきたかったから（笑）。その願いは夢や憧れで終わることなく、カリフォルニアの協定校への留学という形で実現しました。あとは明治学院大学といえば、インターナショナルなイメージが強かったことも理由でした。学校全体が「語学」というムードに包まれているというか、これはキャンパスを訪れていただければ、すぐに感じていただけると思います。高校生のみなさん！ぜひオープンキャンパスにいらしてください（笑）。

■卒業生
私も海外留学の経験が大きいと思います。奨学金の制度を使って、ニュージーランドで高校３年間を過ごしたのですが、言葉が違うのは当然で、さらに文化や物事の捉え方などは本当に千差万別でした。たくさんの経験ができた３年間でしたが、その中で、いろいろな思いや感情が私に芽生えていきました。

■大学生
どういったことですか？もっと世界を見たいといったことですか？

■卒業生
そうですね。もちろんそれもあるけれど、もっと単純に「自分にはこれから何ができるんだろう」といった、未来に向けた高校生ゆえの葛藤のようなものですね。今でこそ懐かしい思い出話。でも、当時はずいぶん悩んだことを記憶しています。

■先生
感受性が豊かな高校生だからこそ、思うところも多かったんだね。

■卒業生

高校卒業を目の前に、私の前には２つの道がありました。このまま海外に留まる道と、日本に戻って留学の経験を活かす道です。進学について調べていく中で、偶然、知ったのが明治学院大学でした。日本国内には、国際的な視点からの教育に特化した学部自体はまだまだ少なかった当時、堂々と「国際学部」と名前がつき、多分野に渡る多様な教授陣が揃っていることに注目しました。ここでなら、語学を含め国際的な活躍につながる知識と経験が得られるのではないかと思い、決めたのです。

■先生
中学や高校時代に海外留学やショートステイなどを経験、いろいろな経験を職業やキャリアに活かしたいと思っている学生は多いですね。一年生に話を聞くとオーストラリアなどの英語圏に留学したという声をよく聞きます。

学生生活で印象的な出来事を教えていただけますか。

■大学生
私の研究テーマは「開発経済」というものです。発展途上国に対してどのような支援を行えば良いか？という大きなテーマで、卒業論文の題材としても取り組んでいます。実はこのテーマは変化する世界の国々の明るい部分だけでなく、なかなか垣間見ることの難しい裏側へ迫ることも研究対象としての面白さがあります。
私が題材として注目したのは、ベトナムのホーチミン市の都市開発でした。高層ビルが立ち、電車などの交通インフラが整備される。それにより人の流れは変わり、経済活動が活発的になる。一見すると、とても理想的な都市の発展に感じます。でも実はそこには思いがけないマイナスが生まれることがあるのです。先生、なんだと思います？

■先生
発展によって生まれるのは階層間の貧困問題かな？

■大学生

正解です。貧困問題に加えて、犯罪率の増加も顕著な変化としてあります。そういった裏側も含めた上で、合理的に行う都市や国の開発について研究を進めました。卒業論文の作成過程において、「机上の仮説では理屈として物足りない。現地の真実にもっと迫ってみよう！」そう思い立ち、単身ホーチミンにいきました。地元の人のタクシー代わりにもなっているバイクに乗せてもらい、市内からかなり離れた市外地のエリアへ。そこにはガイドブックにも資料にも決して載る事のない、貧困に苦しむ人たちの本当の姿がありました。

■先生
広い世界のほんのわずかだけれど、真実の姿を自分で見てきたことは、素晴らしい体験でしたね。

■大学生
本当にそう思います。英語を使いこなすキャリアウーマン的なイメージをもって入学しましたが、知識が深まるにつれ、知りたいことや関心の対象が変わっていったのは事実です。そうでなければ、ひとりでホーチミンには行ったりしませんよね（笑）

■先生
いったい、いつの間にそんなアクティブな学生になったのでしょうね。

■大学生
そうですね、自分でもビックリしています（笑）。どこにいくにせよ、何をするにせよ、行動力の源は「知りたい」という探究心だと思うのです。そして、その探究心を刺激してくれるカリキュラムが明治学院大学にはたくさんあったのだと思います。例えば世界の歴史など知る授業では、基本的な知識だけでなく、メディアなどではとりあげることが難しい問題やタブーともなりえる話題にも切り込んでいくこともありました。
あとは、大学の仲間やボランティア活動で知り合った友人たちの存在も大きいですね。私は開発途上国の食の問題、先進国の肥満や生活習慣病の問題に同時に取り組む table for two プログラムの活動に大学の代表として参加していましたが、そこで出会った他大学の学生や社会人と、国際社会の抱える問題について議論などもよくしていました。そういった時間の積み重ねが私の根本的な部分に影響を与えたと思います。

●就職活動、仕事について

現在のお仕事について教えていただけますか?

■卒業生

以前、JICA（ジャイカ：独立行政法人　国際協力機構）で、広報に関する仕事に携わっていました。

■大学生
JICA ですか！すごいですね。学生の間では、JICA は活躍の場所として憧れの対象なんですよ。

■先生
国際社会においてとても重要な役割を担う JICA について、高校生はどれくらい知っているかな？ちょっとだけ説明してあげたほうがいいね。

■卒業生
開発途上国と呼ばれる国々が、自分たちの力で確かな社会を築いていけるよう、資金や技術などで支援するのが JICA の活動の主たるものです。例えば、教育が普及していない国があるとしますよね。その場合、普及していない背景も踏まえ、相手国と協議します。その上で足りない学校を建設したり、教員を養成するために日本から人を派遣して助言したり、現地の教育関係者を日本に受け入れて実際に学校をみてもらったりもします。これ以外にも、その国の社会に必要なインフラを整える事業など、その国が自分たちの力で問題を克服できるよう、あらゆる方向からの支援を行います。さまざまな活動によって、その国の暮らしや経済が発展する。そして、その結果、貿易活動や文化の交流などで、世界の関係がもっと良いものになることを目指していきます。
ODA（政府開発援助）という名前を聞いたことがあると思いますが、JICA は ODA で決まった予算や目標などを、具体的な活動で実現させていく組織だと思ってください。

広報のお仕事とのことですが、どのようなものだったのでしょうか。

■卒業生
支援を行うための計画を立てる仕事、物資を準備する担当、技術者の派遣やボランティア募集などの人にまつわる立場など、いろいろな役割がありますが、私は JICA の活動全体の進捗や成果などを国内外に伝える仕事をしていました。
具体的に言うと、まずは国内外のメディアへの取材対応や調整がひとつです。あとは広報に関する出版物などの作成業務などもあります。有名な J リーガーといっしょにアフリカにわたり、そこで発展途上国の現状をみていただいた感想を記事にして、若い世代を含めた幅広い方々に JICA の活動を知ってもらうようなこともしてきました。

■大学生
世界に向けて、大切な情報や意義ある取り組みを発信していく役割、とてもすごいお仕事ですね。

■卒業生
とてもやりがいはあったけど、それゆえに大変だった部分も多かったですよ。とりわけ世界各国の人々との「やりとり」は、やっぱり大変でした。というのもメールや電話でやりとりをする際は英語を使いますが、全てが完璧な英語ってわけじゃないんですね。めちゃくちゃな文法は日常茶飯事（笑）。でもそこには各国の方の思いや考え、あるいは国の代表としての責任感が当然あります。そういった

意図を汲み取るには、美しい英語力ではなく、その国の背景や国民性などを理解して、コミュニケーションを取る意欲や心遣いのほうが何倍も大事なんですね。振り返ってみると、どんな場面でも対応できる英語力、相手の立場や思いを察しながらまとめていく調整力や交渉力等の基礎的な要素は「国際学部」で身につけました。

■先生
そうそう、大事なのは相手のことを正しく理解してコミュニケーションができる力です。真の意味での国際社会での活躍を実現している例が彼女だと思っています。今もその経験を活かして活動を続けているんだっけ？

■卒業生
東京都文京区でアカデミー推進員として、地域における国際理解を進める機会づくりなどに協力しています。大学が多い文京区は海外からの留学生も含めて、外国の方がたくさん住んでいる地域でもあります。もともと住んでいる住民と日本での暮らしを始めた外国の方が、うまく交流しながら、ひとつのコミュニティを作り上げるため、様々な事業が区で実施されていますが、推進員の立場から、事業の評価や提案をしています。

■先生
相変わらず行動的ですね（笑）。子育てもしつつ、まだまだ自身の経験を活かして、新しいキャリアを積んでいく。うん、誇るべき「お母さん」だね（笑）。

■大学生
本当です！子育てと仕事を両立させながら、自分の夢に向かってがんばる姿。同じ女性として憧れます！私もがんばらないと！

● 5 年後に向けて

これから先の夢はどんなものでしょうか?

■先生
教育的な部分では、学生がどんどん海外に出て、自分を見直し、新たな発見ができる機会を積極的に推し進めたいと思います。今ではインターネットを通じて海外の若者とダイレクトに会話をしたり、バーチャルな海外体験ができる便利な世の中になりました。しかしながら、現地にいかないとできない体験もあるし、怖いことや想像以上の感動もある。そう、それは肌で感じとる世界の真実です。そういった体験は大人になってからでもできるものの、学生のうちのほうが時間とパワー、そして純粋な気持ちを投入できることは間違いありません。そういった機会が大学というシステムの中でもどん

どん提供できるようにしたいと考えています。

■大学生
インフラやITに関する様々な事業を行う会社への就職が決まっています。具体的な仕事はまだわかりませんが海外とも関われる部門に配属されるので、そこでこれまでの経験を活かしてがんばりたいです！

■卒業生
もともと広報に進んだのは、いろいろな事実や見過ごされてしまいがちな出来事を多くの人に伝えたいという思いがあったからです。学生時代もサークルを立ち上げて、留学生と在校生の交流の機会、帰国子女のネットワークをつくったりしながら、その思いを形にしてきました。この先、5年後、10年後も、会社や役割に関係なく、何かを伝え、気づきを促せるようなことに取り組んでいきたいですね。昔と今と違うのは、愛すべき子供ができたこと（笑）。母という目線からもいろいろな取り組みにチャレンジしたいです。

●高校生へのアドバイス

高校生へのアドバイスやメッセージをお願いします。

■大学生
英語力を鍛えておくことも良いと思います。入学してしまうと徹底的に英語漬けになるので、基礎だけはしっかりしておいたほうが楽かも（笑）。意味はしっかりわからなくても良いし、好きなジャンルの外国語の本を一冊まるごと読むといいと思いますよ。

■卒業生
私からは進学先を決めるときのアドバイスを。高校生の時は何を専攻したいか、まだ定まらないのは当然です。だからこそ、何かひとつ強い関心を持てるものを持っておくとよいと思います。語学でも歴史でも、自信を持てる知識は、自分にとっての引き出しになり、何かの選択に迫れた時、ひとつの判断基準になると思うからです。それと関連するかもしれませんが、国際的な仕事や活動をするにあたっては、自分の国の歴史や文化等を身につけておくことも大事です。また、ボランティアやなんらかのグループ活動などに参加して、いろいろな価値観を体に入れておくことも大事かも。大学や社会に進むと、視野がどんどん広がっていきますが、高校時代は家族や学校の友人というように、他者と接する機会は比較的狭い範囲に限られてきます。いずれ多くの人と関わるような仕事をすることが目標なら、いろんな立場になって考えることが必要になりますからね。高校生のうちから、視野や価値観を広げておくことに越したことはないですよ。

■先生

高校生のうちは、関心があるものを、とことん深く考えてみましょう。例えばディズニーランドが好きならば、なぜ好きなのか？どうしてそれが気になるかを突き詰めていことをおすすめします。考えるほどに真理に近づいていく過程と、自分なりの答えを見つけた時の達成感をいくつも経験して、考えるクセを徹底的につけて欲しいですね。

世界は広く、そして興味が尽きません。世界にはいろんな形の社会があり、文化が存在、そしてそこに住む人がいます。仕事で接することになることもあれば、その人たちと友人になることだってあるでしょう。もしかすると国際結婚で家族になるかもしれません。しかしながら、異なる社会にいる人たちと密な関係を結ぶには、実はとても大変なことです。言葉を超えた人間と人間のコミュニケーションや、海外の人々と向き合える資質を明治学院大学でしっかりと身に付け、いろんな世界へと飛び出して欲しいと思います。

●インタビューに答えてくれた方々

■先生
竹尾茂樹先生

■卒業生
花園千波さん

■大学生
田中真穂さん